



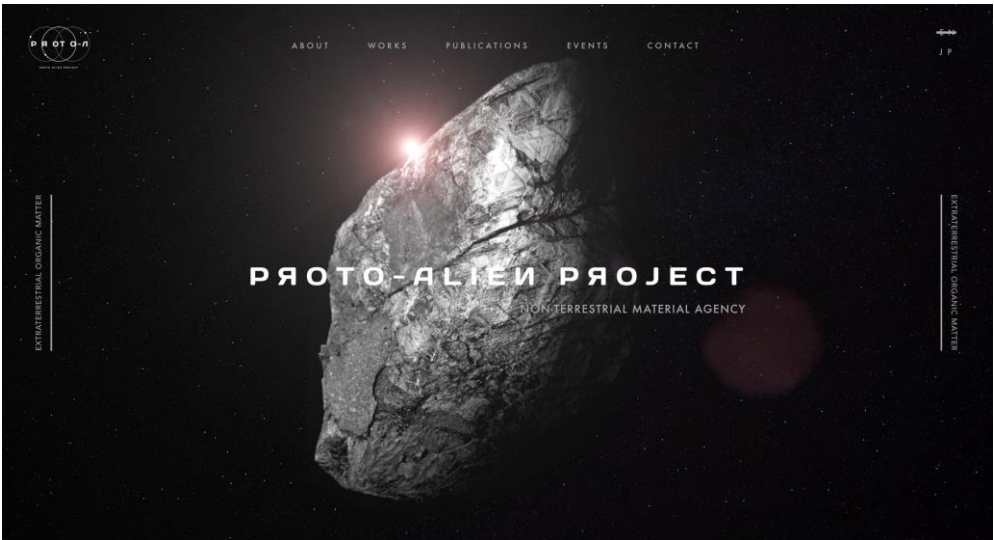
情報科学芸術大学院大学附属図書館

vol. 21

2022.8

IAMAS 図書館便り

IAMAS [イアマス] とは、情報科学芸術大学院大学の英語表記の頭文字を取った略称です。



カストロ准教授著作

特集 メディア・アート **ホアン・マヌエル・カストロ**
→自作を語る／思い出の一冊／学生に薦める一冊

●図書館活用術（3）レファレンスサービスについて

特集 メディア・アート ホアン・マヌエル・カストロ

この特集では、IAMASの教員に、自著・思い出の一冊・お薦めの本などを紹介してもらいます。第21回は、カストロ准教授です。



→自作を語る

プロトエイリアン・プロジェクト (<https://proto-a.jp/>)

2019年に「プロトエイリアン・プロジェクト (Proto-A)」を開始し、「非人間的なエージェンシー」「生命らしさ」「地球外の生命」が交錯する領域について、作品制作やシンポジウムなどの議論の機会を作っている。このプロジェクトの目的は、芸術的な表現のための能動的なメディアとしての地球外有機物 (ETOM) の合成と活用法の探求である。特に、ETOMの自己集合力、形態形成的性質、およびその動的なふるまいに注目している。このプロジェクトの最初の成果は「FORMATA」(2020-2022) という作品である。FORMATAは、水のない異星のミニ惑星における、地球外的で、活動的で、自発的なエージェントだ。その柔らかい体は、隕石や彗星に見られるような有機物質に似たもの、すなわち、脂肪酸、炭化水素、アミノ酸で構成されている。この作品が私にとって重要なポイントは、ETOMでできたエージェントの集団が、実験的に構築された地球外環境で遂行能力をもち、自律的にふるまう様子を、鑑賞者に直に体験してもらうことである。FORMATAは自己組織化された物体、組み込まれた原始代謝、変形・移動・自己分裂の能力のすべてが、マテリアル・エージェンシーの形で、この自己集合体の中に存在することを示そうとしている。

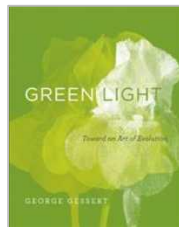


Proto-Alien Project/
2019年 - 継続中

→思い出の一冊

George Gessert 『Green Light: Toward an Art of Evolution』(MIT Press, 2010年)

人類の祖先が約5万~7万年前にアフリカから各地に広がって以来、人類は地球の動植物にさまざまな形で影響を及ぼしてきた。しかし、現在のバイオテクノロジーが進展する環境を考えると、これまでに人類が自然に与えた影響は、あまりにすぎないかもしれない。バイオテクノロジーと文化の関係やバイオアートの歴史の理解のために、この本を紹介する。これは バイオアートのパイオニア、George Gessertによる「Green Light: Toward an Art of Evolution」という本である。新石器時代に農業が始まり、動物が家畜として飼われるようになって以来、人間は自分たちの都合に合わせて生物を操作してきた。しかし、Gessertが私たちに思い出すように促す重要なことは、こうした操作の目的が実用面に限らなかったことである。人類はいつの時代も(見た目や思い入れ、あるいは象徴性) 美学的な理由として生物を改変してきた。この生物学的操作は、今後どのように我々自身の生態と進化の道筋に影響するのでだろうか? この本では、この問いについて、さまざまなバイオアート作品を通して見ていくが、その答えは一言でいうと自然はとてとても奇妙で美しく、しかし私たちが慣れ親しんでいる存在とは似ても似つかないものになる可能性があるということである。



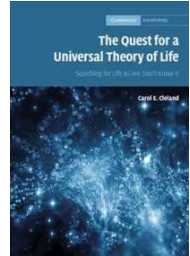
MIT Press/2010年

→学生に薦める一冊

Carol Cleland 『The quest for a universal theory of life』 (Cambridge University Press, 2019年)

生命の系統樹を見ると、すべての生命体は突き詰めると一つの共通の原始細菌、つまり生命の全生物最終共通祖先 (LUCA) なるものから生まれてきたことが明らかになってきた。このことが意味するのは、私たちには生き物としてのサンプルがたった一つしかないということである。別の言い方をすれば、私たちは生命の形をたった一つしか知らないため、私たちが生命にとって決定的だと考えている物質と形質が実際にユニバーサルかどうかはいまだにわからない、ということである。

Carol Cleland が「The quest for a universal theory of life」で言うのは、この難問にアプローチする方法は、ウェットな人工生命、ウイルス、極限環境微生物から得られるということだ。しかし、生き物について考える際、対象を地球上の生命に人為的に制限しないことが重要である。なぜなら、地球上の生命の生態は「大いに誤解を招きかねない限定的な生命の例」だからだ。何かを生きた状態にするもの、それを可能にする多様な物質の範囲、および奇妙な化学組成が宇宙で発見されていたかもしれない度合を本当に理解するには、何らかのエイリアン (影の生物圏や地球外生命) を見つける必要があるようだ。



Cambridge University Press/2019年

◆利用案内

- 開館時間 月-木 10:15-19:00 / 金 11:15-20:00
- 休館日 土曜日・日曜日・祝日、年末年始、臨時休館日 (蔵書点検など)
- 貸出

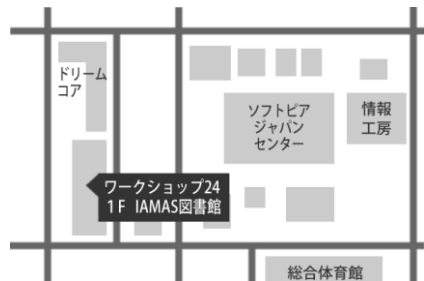
学生 20冊・3週間以内

卒業生 5冊 (図書のみ)・2週間以内 (コロナ対策中は休止)

学外者 2冊 (図書のみ)・2週間以内 (コロナ対策中は休止)

※新型コロナウイルス感染症対策のため、一部のサービスを変更しています。

- ・学外の方 (卒業生を含む) の利用禁止
- ・マスクの着用、図書館入口での手指消毒の実施



図書館活用術（3）レファレンスサービスについて

司書の渡辺です。いつも図書館をご利用いただきありがとうございます。

皆さんがもつ図書館のイメージは、本棚に並んでいる本を取り出して、その場で読むか借りるところ…というのが強いだろうと思います。もちろんそれも大事なことなのですが、それ以外にも図書館ではさまざまなサービスを提供しています。その中でも近年多くの図書館が強調しているのが、「レファレンスサービス」です。

レファレンスサービスは、日本語では「参考調査」などと訳されますが、これだと意味が通りにくくつつきにくい感もあるので、カタカナのまま用いられることが多いです。適当な資料が見つからないときや文献の探し方が分からないといったときに、司書が図書・ネットなど図書館がアクセスできる資料・情報を使ってアドバイスをしたり、他の図書館や専門機関を紹介したりするサービスのことです。

レファレンスサービスがどのようなものかイメージするには、具体的な事例をみてみるとよいでしょう。国立国会図書館が整備しているレファレンス協同データベースでは、全国の国会図書館・県立図書館をはじめとするさまざまな図書館が受け付けた利用者からの質問と、それに対する図書館の回答事例を知ることができます。ある分野の資料がどこに載っているのか、どこが所蔵しているかといった定番の硬い質問から、子どもが「この幼虫なに？」と見せに来たのを、虫嫌い（と思われる）の司書が頑張って直視しながら図鑑と見比べる…といった微笑ましいものまで、おそらく皆さんが想像する以上にバラエティ豊かなレファレンスが寄せられています。またレファレンス事例集と言えば、小林昌廣先生が「今週の一冊」でとり上げていた『100万回死んだねこ 覚え違いタイトル集』（福井県立図書館編・講談社刊）もその一つ。質問者のあやふやな言葉や記憶からいかに目的の本を見つけるか、笑いながらも感心させられます。

もちろん当IMAS附属図書館でも、レファレンスサービスは受け付けております。「この論文を入手したい」、「この分野の本はどの書架にあるか」、「これについて無料で検索できるデータベースはないか」など、どのようなことでもまずはお尋ねください。もちろん皆さんが研究されている分野について、私たち司書が詳細な専門知識をもっているわけではありません。ですが、いったん文字になって公開された情報であれば、それをいかに探し出すかというのが司書の専門分野です。司書資格の講座では、利用者の求める資料は「草の根分けても探しだせ」と教えられます。知りたい分野の概要やすでに調べた資料など、詳しく伝えてもらえれば、可能な限り希望にお応えします。このあたり、司書と利用者の共同作業とも言えますね。

当館以外の図書館でも、レファレンスサービスに力を入れない図書館はない、と言っても過言ではありません。図書館の窓口に行けない場合でも、メール・電話などで対応している図書館も多いです。特に、ある地域について調査している場合は、地元の図書館にしかない資料がしばしば必要となります。そういうときには、図書館のWebサイトでレファレンスサービスを申し込んでみてください。きっと親身に対応してくれるはずです。

【参考URL】

- レファレンス協同データベース： <https://crd.ndl.go.jp/reference/>
- 覚え違いタイトル集（福井県立図書館）： <http://www.library-archives.pref.fukui.lg.jp/tosyo/category/shiraberu/368.html>



レファレンス協同データベース（国立国会図書館）



『100万回死んだねこ』（講談社/2021年）